



Data 2023-47

監督: ベテル・マガート
 脚本・原案: ユエン・グラス
 出演: アリシア・アグネソン/ラクラン・ニーボア/ブライアン・キャスプ/クララ・ムッチ/ヤン・ヤツクリアク/エイミー・ラフトン/アビゲイル・ライス/クリスティーナ・カナートヴァー

👁️👁️ みどころ

ポーランドを舞台とする“ナチスもの”、“ヒトラーもの”は数多いが、チェコスロバキアを舞台とするそれは珍しい。しかも、原題の『Little Kingdom』に対して、本作の邦題は何と『未来は裏切りの彼方に』。本来“裏切り”は恥ずべき、非難されるべきことなのに、なぜこんな大胆な意訳を？これでは“裏切り”を奨励することになる恐れも・・・？

脱走兵であることを知られたくない男と、娼館の女であることを隠している女。「誰にでも秘密はある」では済ませられない、そんな秘密の保持は一体いつまで？微妙なバランスの中で成り立っていた『Little Kingdom』はナチスドイツの劣勢化に伴い、どう変化していくの？

そんな状況下、“裏切り”は必然だが、そこから壊れていく人間関係は如何に？しかして、再度この邦題は適切なの？いろいろと、じっくり考えたい。



■□■これはナチスもの？冒頭の兵士たちは？■□■

私はナチスもの、ヒトラーものが大好き。その延長として2020年5月には『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集』を出版している。しかして、本作はそのナチスもの？ヒトラーもの？

本作のインタビューで「21世紀の時代においてナチスやヒトラーを取り上げる理由は何でしょうか？」と質問されたベテル・マガート監督は、「戦争映画には魅力的な側面があるが、本作に関して言えば、そのジャンルから少し外れると思っている。」と述べた上、「必ずしも戦争映画というジャンルには入りません。ただ、スロバキアに関してご説明しますと、この国は昔、ナチス側の思想を持っていました。ヒトラー寄りではありますが（補足として：戦争が終わる前に、スロバキア民衆蜂起による反撃をした事によって、思想がひ

っくり返った国家です。)、この国は第二次世界大戦における過去との折り合いがまだ、つけられていない部分が大きくあります。そんな中、近年まで、政府でも4番目に強い政党が、ナチス寄りの国粋主義的な政党でした。恐ろしい一面を持った国でもあったんです。」と説明している。しかし、そもそもスロバキアの歴史に疎い日本人には、そこら辺りは分かりにくい。

本作冒頭、森の中を歩く一団の敗残兵とおぼしき男たちが娼館を見つけて喜ぶシークエンスが登場するが、これは第二次世界大戦末期のチェコスロバキア第一共和国の歩兵部隊らしい。本作の主人公ジャック（ラクラン・ニーボア）を含む彼らは娼館に入り、女たちを“鑑賞”した後、女を連れてそれぞれの個室へ。しかし、ジャックだけは美人の娼婦キャット（クララ・ムッチ）の誘いにもかかわらず一通の手紙を握りしめて娼館を飛び出したが、これはひょっとして脱走？

■この「小さな王国」なら安泰？いやいや・・・■

妻のエヴァ（アリシア・アグネソン）の元へ戻ったジャックは、脱走兵であることを隠してエヴァが働いている軍需工場と共に働くことになったが、スロバキアではそんなことが可能な？日中戦争から太平洋戦争時代の日本の陸軍ではそんなことはあり得ないが、ナチス支持勢力とそれに反対するレジスタンスや武装蜂起勢力が混在していた当時のスロバキアではそんなことも可能だったらしい。

他方、本作の邦題は『未来は裏切りの彼方に』だが、原題は『Little Kingdom』。日本で「キングダム」といえば、原泰久原作の『キングダム』をすぐに連想する。すでに公開された『キングダム』（19年）（『シネマ43』274頁、『シネマ44』172頁）、『キングダム2 遙かなる大地へ』（22年）（『シネマ51』158頁）に続いて、近く『キングダム 運命の炎』が公開されるが、「Little Kingdom」とは傲慢な男パール（ブライアン・キャスプ）が独裁経営する軍需工場のことを指しているらしい。もともと、大砲の弾を生産しているこの工場は、戦争継続中は景気が良かったものの、ナチス・ドイツの勢力が弱まり、ソ連の侵攻が始まる中、戦争が終結してしまうと、軍需工場は無用の長物になってしまう。目下、そんな心配で夜もおちおち眠れないパールが政府の高官ハナーチェック（ヤン・ヤツクリアク）にそれを相談すると、ハナーチェックは「俺の愛人と結婚すること」というとんでもない条件と引き換えに、工場の安定経営を約束したからアレレ。さあ、パールはどうするの？こんな状況でも、パールの軍需工場は「Little Kingdom（小さな王国）」と言えるの？

■第二次世界大戦前後のチェコスロバキア情勢は？■

戦後生まれの私は、チェコスロバキアと聞けばすぐにソ連型の社会主義国を連想し、続いて1989年の「ビロード革命」を連想する。その連想の通り、1945年にナチスドイツから解放されたチェコスロバキアは、1948年以降はチェコスロバキア共産党の事実上の一党独裁制によるソ連型社会主義国となり、さらに1960年には国名をチェコス

ロバキア社会主義共和国と改め、1989年までそれが続いた。しかし、1989年に起きたベルリンの壁崩壊や天安門事件の影響を受けた1989年のビロード革命によって、チェコスロバキアも共産主義体制が崩壊した上、1993年1月1日には連邦制が解消され、チェコ共和国とスロバキア共和国に分離された。

他方、第二次世界大戦は1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランド侵攻によって始まったが、その影響をもろに受けたのが1918年10月にオーストリア＝ハンガリー帝国から独立したチェコスロバキア共和国（第一共和国）。2022年2月24日に起きた、ロシアによるウクライナ侵攻がウクライナの西側にあるポーランド等に大きな影響を与えたのと同じように、1939年のナチス・ドイツによる東方侵攻の電撃作戦は、チェコスロバキア共和国にも大きな影響を与えた。しかも、1939年当時のナチス・ドイツの力は2022年のロシアによる西方侵攻より遥かに強力だったから、ポーランドに続いてチェコスロバキア共和国も9月1日にはナチス・ドイツに併合されてしまった。

本作冒頭に見たジャックたち一団の兵士はチェコスロバキア共和国（第一共和国）の兵士だが、実際にはナチス・ドイツの支配下にあり、東方から反攻してくるソ連軍に対抗していた軍隊だ。したがって、彼らがナチス・ドイツに反対するレジスタンスの攻撃対象にされたのは仕方ない。脱走したジャックは知らなかったものの、後にキャットの口から聞かされたところでは、あの娼館にはレジスタンス武装勢力が押し入り、その中の兵士たちは全員殺されてしまったらしいから、まさに人生は糾える縄の如し。もし、あの時ジャックが脱走せず、仲間と共に東の間の享楽に浸っていたとしたら・・・？

■□■この再会にビックリ！互いの秘密の保持は？■□■

官と民の癒着構造は“腐った社会”ではもとより、“正常な社会”でもまま（常に？）あること。したがって、バルが「Little Kingdom」とも言うべき軍需工場を終戦後も独裁的に支配していくために、高官のハナーチェックに頼ったのは当然だ。そこで、私がよくわからないのは、なぜハナーチェックは前述のような条件をバルに出したのかということ。飽きてしまった愛人を、揉めたくないため、何でも言うことを聞く部下に“払い下げる”ことはままあるが、本作はひょっとしてそれ？そうとも思ったが、ハナーチェックはキャットに対する愛情を失っているように見えない。それは、バルが暴力を振るったことをキャットから聞かされると、烈火の如く怒っていた姿を見れば明らかだ。ならば、なぜそんな条件を？

私はそれがわからないまま本作の鑑賞を終えたが、ストーリー構成上最大のポイントは、そこではなく、キャットとの盛大な結婚式を終えたバルが工場内でキャットを連れ回していたところ、ある日ジャックとばったり遭遇すること。互いに一目で、「これは、あの時の女！」「これは、あの時逃げ出した客！」とわかったが、脱走兵であることを隠したいジャックと娼婦だった過去を知られたくないキャット間の、互いの秘密の保持は？また、そんな秘密を巡って、2人の利害はどこまで一致？どこで衝突？

■□■めでたく妊娠！だが、お腹の子は誰の子？ひょっとして？■□■

他方、ジャックが戻ってきてからのジャックとエヴァとの夫婦生活は順調らしい。ジャックが戦場に行っていた中で流産の悲しみを味わったエヴァは今、それを乗り越えるためにも、再度の“愛の結晶”を望んでいたから、2人は忙しい仕事の傍らその方面にも励んでいたらしい。その結果、エヴァはめでたく妊娠！それはそれで喜ばしいことだが、夫の帰りを待っていたエヴァの同僚のジュリア（エイミー・ラフトン）が、戦場で夫の死亡を聞かされた後、その悲しみとエヴァとジャックへの嫉妬心の中、「ジャックが留守の間のエヴァはバールから可愛がられていた」とジャックに告げたから、さあ大変！ジャックの心の中にはエヴァとエヴァのお腹の子供について“ある疑惑”が生まれてくると共に、日々それが増大していくことに・・・。

人間は、誰にでも秘密の1つや2つはあるもの。そう割り切ることができれば人生は簡単だが、そうはいかないのが人間。まして、第二次世界大戦末期のチェコスロバキアの「Little Kingdom」を舞台とした本作の登場人物たちは、全員曰く因縁をもち、重大な秘密を持った人物ばかり。ジャックの秘密とキャットの秘密を中心に、彼ら彼女らの様々な秘密はいつ誰のどんな行動の中、如何なる連鎖で明かされていくの？

■□■裏切りはやっぱりダメ？この邦題を認めていいの？■□■

チャン・イーモウ監督がハリウッドの大スター、マット・デイモンを起用し、米中融合を目指した壮大な歴史劇が『グレートウォール』（17年）（『シネマ40』52頁、（『シネマ44』116頁）だった。同作の設定は12世紀の宋の時代。なぜか、そこにマット・デイモン演じる傭兵が登場し、“ある目的”のための長城建設に協力することになるが、同作のキーワードは“信任”だった。つまり、中国人であろうとヨーロッパ人であろうと、皇帝を守り、首都を防衛するために中欧が共に戦うためには、何よりも“信任”が大切だということだ。

ちなみに、1600年9月15日に戦われた“天下分け目”の関ヶ原の合戦は、小早川秀秋の裏切りによって石田三成率いる西軍が徳川家康率いる東軍に敗れたから、古今東西、裏切りは武人として最も卑劣な行為とされてきた。それなのに、本作の邦題は、『未来は裏切りの彼方に』だからアレレ。これでは本作の鑑賞者や未来を担う子供たちに裏切りを推奨することになり、悪影響を及ぼすのでは？

そんな私の心配通り、そしてまたジャックが心配していた通り、常にいい立場に立ちたがるキャットは、ある日、ある状況下で、「この男は脱走兵です！」と告げ口したからさあ大変！ジャックの逮捕、処刑が目の前に迫ってくる中、今や臨月となり、大きなお腹を抱えたエヴァはどうするの？

そんな登場人物相互間の秘密をめぐる駆け引きも重大だが、他方、東からのソ連軍の侵攻にナチス・ドイツはいつまで耐えられるのか？という客観的な軍事情勢も大切。またハーネックが提示した奇妙な条件を丸呑みし、終戦後の工場経営の約束をとりつけたバー

ルだったが、レジスタンスの力が強まってくると、その約束はさて？

■キネマ旬報での評価は大分裂！英語劇は不自然？■

私はいつもキネマ旬報の「REVIEW 日本映画&外国映画」を読んでいるが、本作については、星2つ、4つ、1つと3人の評価が大きく分かれている。ナチスもの、ヒトラーものを英語劇にすることの不自然さは、私がいつも感じること。それは、とりわけ共にハリウッドを代表する大スター、トム・クルーズ主演の『ワルキューレ』（08年）（『シネマ22』115頁）と、ブラッド・ピット主演の『イングリシア・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）で顕著だったが、スロバキア映画である本作でもそれは同じ？ナチスもの、ヒトラーもの本場は当然ドイツだが、フランスやポーランドを舞台にしたナチスもの、ヒトラーものも多い。しかし、スロバキアを舞台にしたそれは珍しく、私は本作がはじめてだ。

前述したように、本作はチェコスロバキアの兵士であるジャックの脱走劇から始まり、エヴァが待つ村に戻り、共に働き始めるところから本格的ストーリーがスタートする。あの時代、あんなところに娼館がぼつんと建っていることや、そこで多数の娼婦が働いていること自体が不自然だが、ジャックを客として迎えた娼婦・キャットが政府高官ハナーチェクの愛人だったという設定も不自然。さらに前述したように、ハナーチェクがパールに対して、キャットと結婚する（押し付ける？）ことを条件として、パールの「Little Kingdom」の継続を保証するという設定も不可解だ。

キネマ旬報「REVIEW 日本映画&外国映画」では、英語劇にしていることにケチをつけた2氏が星2つ、星1つとしている上、その他の評価も低い。「ハイル・ヒトラー！」と叫ぶべきところを、英語で叫ばれたのではさすがに違和感が大きすぎるが、本作はそうではないので、私にはそんなに違和感はなかった。というより、そもそも私には星1つの評論家が言うように、「登場人物がそれぞれにてんでんバラバラな訛りの英語を話すのがわからない。」と書いていること自体がわからなかった。「REVIEW 日本映画&外国映画」でこれほど評価が分かれる例は珍しいので、ご参考までに・・・。

2023（令和5）年4月24日記